

Foot print フットプリント

写真資料調査
部会発行
H30.1.1
編集・草野

2018年
第23号



2017年を振り返って

明けましておめでとうございます。

新春早々「2017年を振り返って」と題してフットプリントをお届けすることになり内心躊躇しています。昨年は「山端庸介生誕100年記念写真展」に大半の時間を費やしました。山端庸介氏は1945年8月10日、つまり原爆翌日「爆心地」に入り地獄の惨状を撮影した方で、原爆写真の原点ともいわれています。原爆写真展は今までにない多くの参観者に入場していただき感激しました。8月9日原爆の日には被爆者代表として「平和への誓い」を宣べさせていただきました、その中で福島を例に原発再稼働のリスクと「平和憲法」について触れさせていただきました。

部会の目的である「原爆写真の収集と検証」については、昨年は、米国青年と長崎市民の一人ずつより約20点の写真を寄贈いただきました。いずれも祖父や父が残した遺品を整理中に出てきたも

ので、原爆から73年を経過した今も眠っている写真があることに、いまさらのどくとく驚かされます。

目を転ずれば北朝鮮の弾道ミサイル（ICBM）発射強行に対する国連の経済封鎖強化、米韓合同軍事訓練の示威活動など太平洋戦争前夜を思わせる事態が見られます。その一方、ノーベル平和賞が非政府組織（NGO）「核兵器廃絶国際キャンペーン（ICAN）」へ授賞されたニュースは、私たち被爆者に勇気を与えました。この機会をとらえ核保有国に核兵器禁止条約への加入を促し、核兵器廃絶へ向かって絶え間ない努力を傾注していかねばなりません。

めまぐるしい世界情勢の中、当部会はアメリカ国立公文書館から持ち帰った原爆写真のキャプション作成に取り組んでいます。世界が戦争に至らないことを祈りながら、部会員一同、本年も精進してまいりますので、よろしくお願い申し上げます。

（部会長・深堀好敏）

深堀部会長 長崎新聞文化章 受章

長崎新聞社が、県内の文化・教育・産業・科学・平和および福祉などの分野で活躍し、大きな業績を残された人を讃えるために設置している長崎新聞文化章の2017年度受章者に、深堀好敏部会長が選ばれ、11月29日に贈呈式および受章祝賀会が長崎新聞文化ホール・アストピア2階大ホールにて行われました。長崎新聞文化章は1955年から毎年、各分野からの推薦の上選考されます。本年度は深堀部会長を含め3人が受章し、受章者が通算200人に達するという記念すべき年度での受章でした。

1979年に被爆者有志6人が発足させた「長崎の被爆写真調査会」は、1983年に長崎平和推進協会写真資料調査部会となりました。深堀部会長は発足当時より38年間、原爆写真の収集、検証活動を地道に続けてきました。昨年、米寿を迎えてもなお、「物言わぬ語り部」としての原爆写真と向き合い続けている姿勢には多くの人が学んでいることでしょう。この受章を機に部会員も、深堀部会長をサポートし、活動を継承していく気持ち新たにしました。



部会で忘年会兼祝賀会。多くの方にお集まりいただきありがとうございました



長崎新聞文化章贈呈式にて。付き添いは事務局の皆さん

山端庸介生誕100年記念写真展 「昭和20年8月10日・長崎」

8月2日から7日まで長崎市立図書館にて、被爆翌日の写真を撮ったカメラマン・山端庸介氏の生誕100年を記念した原爆写真展を開催しました。被爆翌日の実相を伝える山端庸介氏の写真をテーマにすることは深堀部会長が以前から希望していたものであり、このたび市長の理解を得て、長崎市の主催で実現しました。

写真資料調査部会が写真の選定やキャプションの作成といった準備作業から、開催期間中の来場者への対応、トークイベントの実施まで全面的に協力しました。被爆翌日の実相を伝える写真は目をおおいたくなるようなものも多くありますが、写真を見て当時のことを思い起こすなど、来場者の方々からはさまざまな感想をいただきました。とくに夏休み期間中ということで10代やお子さんの来場者も多く、真剣に写真と向き合う姿も印象的でした。

また、期間中の8月6日はちょうど山端庸介氏生誕100年の日であり、山端庸介氏のご長男である山端祥吾氏が来崎され、深堀部会長との対談を催しました。

祥吾氏は山端写真の伝える力について、ご自身のこれまでの研究をもとに丁寧に解説して下さい、写真への理解を深めるうえで大変貴重な時間となりました。今回は深堀部会長にとっても一層体調に配慮しながらの写真展開催でしたが、おかげをもちまして無事に終了することができました。写真資料調査部会は今後ともより多くの人に被爆の実相を伝え、平和について考えるきっかけになるよう活動が続けてまいりますので、よろしくお願いいたします。

(部会員・草野優介)



山端祥吾氏と黒こげの少年の写真の前で

〈来場者アンケートより〉

6日間での来場者は延べ2124名で、2日目からはマスクも報道もあり、毎日150名前後の方々がいらっしゃいました。その約4割の方にアンケートにご協力いただき、今回の写真展で「被爆の惨状は伝わったか」という問いにほとんどの方が「非常に良く伝わった」と回答していただきました。

アンケートの中で印象的だったコメントをご紹介します。

「言葉がなくす。どんな話を聞くよりも原爆の恐ろしさが体の中にじわじわと伝わってきました。怖くて目をそむけたくなりましたが、今を生きる人間が後世に語り伝え続けなければいけないと強く思いました。決して他人事ではない。被爆国の国民として平和について今後も考えていきたい。貴重な資料を展示していただきありがとうございます」

もう一人の方は、「ありのままの状況を切り取った写真がとてもよかったです。目をおおいたくなるようなものもありますが、その嫌悪感をいだかせるものこそが原爆であり、戦争だと思えます。本気で、いやだ、怖い、そういう気持ちで改めて感じる写真展でした。子どもには辛い写真もありますが、逆に本当のことを知ってもらう機会になるのではない

でしょうか。二度とあってはいけません。が、原爆のことが単なる昔あった思い出となりませんように。リアルなこととして、いつまでも心にとめておくことができますように」

また会場で出会った方のお話で、「川南造船所に居たが、翌日船で大浦海岸に着いて下の川付近で、立ったまま死んでる人と、周りには沢山の死体があった。2日後には死体は、かたづけてあった」山端カメラマンより少し前に通過しているようでした。訪れた方々から毎日多くのお話を聞き、原爆の悲惨さを改めて思い起こした写真展でした。

(部会員・峰下正道)



山端祥吾さんとのトークイベント

— 2017年8月 山端庸介写真展・平和祈念式典 —



主催者・田上富久長崎市長を囲んで



連日、マスコミや来場者の対応をする深堀部会長



山端祥吾氏と出島内外倶楽部にて



写真展へむけて原爆資料館の弦本学芸員と毎週作業を行った



市職員に付き添われ登壇する深堀部会長



平和への誓い

市民のつどい参加（10月28日）

10月28日、今年も恒例の「市民のつどい」が開催されました。

写真資料調査部会は例年、原爆資料館の階段前広場にある平和の母子像前で原爆写真展を行っています。今年はいくくの雨となり、原爆資料館観覧券売り場前の円形パビリオンにて実施しました。原爆資料館が展示している写真と重複しないよう、予定していたパネルを急遽変更するなど、設営に少し時間がかかりましたが、観光客や外国の方がたくさん訪れ、原爆写真を真剣に見てくれました。



原爆資料館円形パビリオンでの原爆写真展

元米兵の孫、祖父の写真携え 長崎を訪れる（10月28日）

10月28日、祖父が戦後、長崎に上陸したというアメリカ人男性が深堀部会長を訪ねた。男性はカリフォルニア出身で、現在は大分県で外国語指導助手をしているトレバー・C・スレヴィンさん。戦後、祖父のキャロル・R・スレヴィンさんが家族に送った被爆直後の長崎の写真を持っていた。トレバーさんの話などをまとめると、祖父・キャロルさんは1945年9月23日にアメリカ海兵隊 第2海兵師団のライフル銃兵として長崎に上陸。12月中旬に長崎を離れた。写真は爆心地周辺で撮影されたもののほか、新発見となる思案橋付近を写したのもあった。写真資料調査部会では事前に撮影場所の確認などを行い、当日は深堀部会長がトレバーさんを市営陸上競技場付近や山王神社一の鳥居があった場所などを案内した。被爆直後の長崎を撮影した写真は、まだアメリカに眠っていると見られ、今後とも国内外を問わず、個人からの情報が寄せられることを期待したい。

（部会員・米澤佑樹）

福井県で初の県外原爆展 （11月5日）

福井県で初めての県外原爆展が敦賀市で、8月から11月まで会場を変えながら開催された。筆者が写真解説者として11月5日の原爆展に参加したが、この頃の福井地方は時折寒風は吹くものの長崎とあまり変わらない晩秋の気候、それが翌月のテレビニュースに映る敦賀市は数十センチの積雪、さすが北国だと思った。

県外原爆展は「プラザ万象」という、長崎市立図書館と長崎市民会館を合わせたような大きな会場の一角、会場に入るとまず目に入るのは長崎でも昨年開催した山端庸介氏の写真、地元の人には少々強烈過ぎるようだったが、三たび原爆が使用されると地球上にこのような惨状が再現されるのですよと説明した。次がビデオコーナーで、原爆関連作品の上映。



トレバーさんに解説する様子

会場を折り返すと被爆資料の展示、柱時計、マリア像、被爆瓦等、それにオバマ大統領が折った千羽鶴も展示され、家族連れ等には特に関心があったようだ。最後が広島と長崎の二つの被爆都市を紹介するパネル写真コーナー、全て見るのに30分はかかりそうな原爆展だった。

今回の写真展は手違いがあったのか、写真の解説パネル等が一部間に合わなかったコーナーもあった。しかし敦賀原発の地元、訪れた人と会話すると原発と原爆を関連した考えも持つ人もみられた。

長崎市が開催する県外原爆展は1994年から始まり、これまでに37都道府県、延べ68都市で開催されているが、長崎市では被爆75年までに未開催の残りの県でも開催する計画だ。

（副部会長・堀田武弘）



敦賀市での原爆写真展の様子